

雪崩から身を守るには

雪崩の犠牲にならないための心得

雪氷防災研究センター 研究員 上石 勲



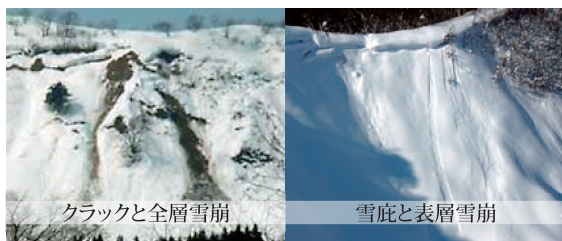
雪崩の発生する時と場所を知る

雪崩から身を守るには、危ない時に危ない場所に近づかないことが第一です。

雪崩の発生しやすいのは、斜面の積雪が不安定な時です。積雪の内部に弱層があったり大量の雪が降った時は表層雪崩、融雪水などにより積雪底面と地面との摩擦抵抗が小さくなった時は全層雪崩発生の危険性が高まります。

雪崩の危ない場所はどこでしょうか。背の高い樹木が少なく、地形勾配30～50度の斜面で雪崩は発生しやすいと言われています。また、雪崩の到達点から発生点を見通した角度が、表層雪崩18度、全層雪崩24度という経験則から雪崩の最大到達点を知る方法もあります。さらに、斜面積雪のクラックが開いたり、雪庇が発達したところも危険箇所です。雪崩の危ない時には、このような危険ゾーンには立ち入らないことが大切です(写真1)。

現在当研究所では、雪崩から身を守るために必要な情報を提供できるよう雪崩発生予測モデルや雪崩ハザードマップの開発・研究を進めております。



クラックと全層雪崩

雪庇と表層雪崩

写真1 雪崩危険箇所

雪崩危険箇所に入る時は

どうしても雪崩危険箇所に入らなければならない時は、つぎの3つの道具を携行することをお勧めします(写真2)。「雪崩ビーコン」は、雪崩埋没者の方向と距離から埋没位置を探す道具です。このビーコンを用いて埋没者に近づいたら、雪面から雪の中に「ゾンデ棒」を刺しこみ、人や物に当たった感触をもとに埋没者を探します。ゾンデ棒は長さ3m程度の金属製の細長い棒です。埋没者が確認できたら「スコップ」で急いで掘り出します。雪崩埋没者は埋まってから15分以上経過すると助かる可能性が急速に低くなります。これら3つは雪崩埋没者をできるだけ早く見つけるために有効な道具です。また、使いこなせるよう日ごろの訓練も必要です。



写真2 雪崩危険箇所に入る時携行すべき道具

長い時間、積雪の中に埋まっていた人は、低体温症になっている可能性があります。人間の身体は体温が下がると、大切な内臓を暖めるためまず手足から冷えていきます。強く手足をさすると冷たい血液が内臓に運ばれてショックを起すことがあるので逆効果です。できるだけゆっくり暖めるようにしてください。